

いなかおかし IX



2003 No.145

東京都世田谷区歯科医師会会報
<http://www.setagaya-da.or.jp/>



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅— XVII

下馬部会 斎藤 賢一

前回は中国のチベット自治区を訪れましたが、今回はラダック地方（インド）のチベット寺院を訪れたいと思います。地図的（政治的）にはインドですがここはまさしくチベットです。中国のチベット自治区は文化大革命で、ほとんどの寺は破壊され、また僧侶もいなくなってしまいました。ここラダック地方は長い間、鎖国政策を行っていたため綿々とチベット文化が続いています。ラダック地方の主都レーにはデリーから飛行機で2時間ほどで着きますが、すぐに欠航になってしまいます。その場合飛行機が飛ぶまで何日も待っているか、陸路でシュリーナガルというカシミール地方の州都で、湖のある避暑地（1700m）を通り、山を越えて行きます。今回案の定飛行機は欠航になり、さらにシュリーナガルのあるカシミール地方は、パキスタン、中国、アフガニスタンに接する重要な場所で、帰属問題をめぐりインド・パキスタン紛争のまっただ中にあり、外人旅行者は入れません。これからどうなるのかと思っていますと、ガイドは他に軍用道路があり一般には開放していないが、この道を使えば、カシミール地方を通らずにレーに行けると言います。この旅が私が経験した最悪の旅行になるとは思わず大喜びしました。なんとか軍の許可を取り付け、まずはパンジャブ州の州都チャンディガールを目指して出発です。およそ5時間ほどで着き、ここで一泊します。ここはフランス人の建築家ル・コルビジエとマックスウェル・フライが機能性を徹底的に追求した都市計画に基づいて作られた近代的な町で、インドとのミスマッチを見てみたく、とても興味がありましたが、観光などしている暇はありません。朝すぐに次の目的地、マナーリーへ向かいます。マナーリー



写—1 「マナーリー」

は標高2000mの高地にあり、14時間もかかり着いたらもう夜中です。夕食（夜食）を食べ、朝はミルク粥を食べ出発です。着いたときには真っ暗でどんな所かわかりませんでしたが、町の中をインダス川上流が流れ、四方を山に囲まれたとても美しい所で、チベット人もちらほら見かけます。道はヒマラヤ杉の間をどんどん登っていきます（写—1）。

途中で食堂兼宿屋が高原の中に一軒だけありここで休憩して、チャイ（ミルクティー）を飲みます。やがて高い樹木はなくなり、岩と高山植物だけになります。ここで、数人の日本人が昆



写—2 「ROTHANG峠」

虫採集しておりびっくりしました。今日の目的地はなんと4200mの所にあるテントでサルチューという場所にあります。やがて最初のROTHANG峠を越えます。周囲には雪渓が残っており雷鳥がいます（写—2）。そして次のBARALACHA峠（4650m）を越えるとサルチューです。前回のチベット旅行では3200mあたりから高山病になりましたが、今回も3500mあたりから高山病が始まり、サルチューに着いた頃にはとてもひどくなってきました。ここは村ではなく、荒野に大小のテントが幾つか

張っており、小さいテントはベットと布団があり、大きいテントは食堂などに使っています(写-3)。空は180度満天の星で流れ星が幾つも見えています。あまりにも星が近く手でつかめそうです。人工衛星も見えますが、高山病がひどく空を見上げてられません。これだけ美しいものは肉体を犠牲にしなければ見られない自然の厳しさを知りました。その夜はまさに地獄で寒くて持っているものを全て着てもまだぞくぞくします。頭は割れるように痛く、呼吸は苦しく、おまけに風がテントに吹き付けビュービューうるさく、ほとんど眠れませんでした。妻も3800mあたりから高山病になり、朝起きるのがとてもつらく、朝食も食べられません。ここからあと一つ峠を越えれば目的地レーですが、この最後のTOGLUNG峠がなんと5200mです。従って周囲の小高い山はみんな6000m以上です。ちなみにラダックとは峠(ラ)を越えて(ダック)という意味です。景色は茶色と雪と雲の白、空の青の三色しかありません(写-4)。ときどき岩山の上にはためくタルチョ(観音菩薩の経文が書いてある布)が色を添えます。この軍用道路は道幅が狭く、また片側が崖になっているところが多く、反対側から軍のトラックが来ると通過待ちしなければなりません。この峠でドライバーがついにダウンしてしまいました。しかし1時間休んで気力で峠を越えました。ここを越えればあとは下りでレーの町はもうすぐです。レーの郊外まで来ると麦畑やリンゴ、アンズの緑がとても新鮮で空気がやさしく感じられます。



写-3「サルチュー」



写-4「TOGLUNG峠付近」

レーの町は小さいがとても活気があり、メインストリートでは露店で新鮮な野菜を売っています。ラサと同じように岩山の上にあるレー王宮を中心に町が広がり、寺は郊外を流れるインダス川沿いに点在しています。

重い頭でまずはヘミス寺へ行くことにします。

ヘミス寺はラダック最大にして最も有名な寺で、17世紀に建てられました(写-5)。

ここのツェチュ祭りはラダック最大の祭りで僧侶が仮面を付けて踊ります。今は時期がずれて祭りの会場の広場は寂しげです。造りはラサの寺院と同じ様ですが、一步境内にはいるとすぐに生活の臭いがして寺として機能していることがわかります。僧侶はいきいきとしており、また参拝者も多く、人々の生活に密着しているようです。内部は前回お話しした「守護尊」の交合像や交合画が多く特に壁画には迫力があり繊細です(写-6)。



写-5「ヘミス寺」



写-6「守護尊」ヘミス寺



写-7「ティクセ寺」



写-8「僧侶」ティクセ寺

ティクセ寺はラダックで最も美しい寺で、丘の上にそびえています（写-7）。何かの儀式なのか10数名の僧侶がチベット独特の笛やシンバルのような楽器を鳴らしながら帰ってきました（写-8）。ここには100人近い僧侶が修行しており、読経が行われます。2階建ての堂の中

には巨大な弥勒菩薩像があり、2階の部分丁度顔になっております（写-9）。間違えて厨房に入ってしまう、慌てて出ようとする僧侶（厨房係）がバター茶をご馳走してくれました。これが高山病には良いみたいで、3杯も飲んでしまいました。

次にシェー寺に行きます。ここはかつての王家の離宮であった寺で、現在はほとんど使用されておりません。しかし内部には12mもある巨大な仏像があります。

シャンカル寺は町のはずれにあり、ホテルから歩いて行けます。小さな寺ですが活気があり、ちょうど読経の最中でした。内部には素晴らしい千手観音があり壁画も綺麗でした（写-10、11）。

どこの寺にも子供の見習い僧が沢山います。

チベットでは一家族に一人は僧侶にします。僧侶はもちろん尊敬される存在ですが、経済状態も関係あります。寺では教育もしますし、衣食住全て賄ってくれるからです。そのかわり見習い僧は寺のことはもとより、先輩や、先生の身の回り一切のことを手伝います。

帰りはどうなるか心配でしたがシュリーナガルから飛行機のチケットが取れたとの連絡が入り、紛争まっただ中のシュリーナガルへ行けるのかと心配しつつレーを後にしました。途中どうやって建てたのかと思われる絶壁に建つラマユル寺を遠くから眺め、FUTU峠（4091m）を越えてカルギルを目指します（写-12）。小さなチベット村で休憩したときにニンジンとアンズを買いました。ニンジンはとても小さいが甘く野生の味で、あんずは甘酸っぱく今回の旅行で一番美味しく感じました。カルギルで一泊して、ドラスと言う世



写-9「弥勒菩薩」ティクセ寺



写-10「千手観音」シャンカル寺



写-11「守護尊」シャンカル寺



写-12「ラマユル寺」



写-13「ダル湖 ハウスボート」

界で2番目に寒い気温を出した村を通り、高山植物が咲き乱れる、トレッキングの基地であるソーナーマルグを過ぎるとシュリーナガルはもうすぐです。ここまで大きな軍の基地が幾つもあり、何回もチェックを受けました。親切なチェックポイントもあり、トイレを借りてチャイやビスケットまでご馳走になりました。

シュリーナガルの第一印象は商店やホテルのシャッターが降りており、観光客はもちろん行人も少なく閑散としていました。しかし良く観察すると街の至る所に、塹壕が掘られ機関銃が備えられています。いやが上にも緊張感が高まります。シュリーナガルを有名にしていたのは美しいダル湖とナギーン湖そしてそこに浮かぶ船上ホテルのハウスボートです(写-13)。ダル湖には600以上のハウスボートがあるそうです。観光客がいないダル湖は静まり返っています。私達はその中で高級な部類のハウスボートに泊まりました。船の中は個室になったベツルム(トイレ、バス付き)

が数室、食堂、居間、ロビーがありデッキがベランダになっています。なんと家具がすべて白檀で細かい彫刻が施してあり、むせかえる様な臭いです。ハウスボートと陸の間はシカラと呼ばれる手こぎボートで渡ります。シカラに乗ろうとすると、どこからかみやげ物屋のボートがウンカのごとく集まってきます。ベランダでぼーっとしていても集まってきます。最後はハウスボートのオーナーまで次から次にみやげ物を出してきます。ここにはとても美しいイスラム庭園が幾つかありますが、どこも閑散としています。翌日おみやげ攻撃から抜け出し、シュリーナガル空港に着いて航空券をもらってほっとしていたら今度は地獄の荷物検査が始まりました。スーツケースを開け全ての持ち物を徹底的に調べます。食べ物を持っていたらそれが安全かどうかその場で食べて見せなければなりません。スプレーなどがあれば全てどんな物が確かめず。わからない物であれば没収です。電池が入っているものは全て別に出さなければなりません。次は飛行機に乗る前に航空会社による、全く同じ検査をまた行います。やっと飛行機に乗れたときには安堵感でいっぱいでした。何とかデリーに戻り日本に帰れました。

二回にわたり二つのチベットを訪れましたが、やはりチベットの中心はラサであり、ラダックは地方の町に過ぎません。ラダック地方の人々はダライラマが住んでいたポタラ宮に憧れ、大昭寺に巡礼したいと思っています。しかし私にはラサには昔の栄華はなく、漢民族の手が入り、近代化され宗教性が薄れつつあるように感じます。ラダック地方は昔のチベットが今なお残っており、チベット仏教が生きています。この違いは中国という大国と、インドという大国の体質に関係があるように思えてなりません。インドという国はパキスタンと宗教的に対立していますが、本質的にはあらゆる宗教を認めあっています。混沌とした国ですが懐の深さを感じました。こんな事を考えた、きついチベット旅行でした。